
マイラブリーボーイ～異説源氏物語・彼女がもしも彼だったら？

秋鹿 柚玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイラブリーボーイ〜異説源氏物語・彼女がもしも彼だったら？

【Nコード】

N4490F

【作者名】

秋鹿 柚玖

【あらすじ】

もし源氏物語の紫の上が男の子だったら？そんなパラレルで、お馬鹿なコメディです！源氏物語が好きな方は読まないことをお勧めします^^；

（前書き）

あんなに源氏に愛されたのに子どもがいなかった紫の上。だからこ
ういうのもアリかなって書いてみました！こんな失礼な話考えたら
怒られそうですね。温かい心で読んで下さい！

「なんとも美しい方だとか！」

「やはり、あの方が源氏君の一の方だ。」

「まるで樺桜のように、淡く霞んだ美しさ。この世の者とは思えない。まさに源氏君にこそ相応しい。」

屋敷の端々で、都のそこ彼処で、宮中の宴で、そこはかとなく囁かれる噂。

それはもちろん宮中一の問題児にして、宮中一の美しさを誇る源氏の君のこと。

誰よりも目を引く彼の一挙一動に、宮中の噂は惑わされっぱなし。そして今回の彼の噂はもちろん。

「何で、俺が一の方なんだよ!!」

若紫は大声で叫んだ。

「まあ、そんな大声出してはしたない。お静かに遊ばせ。」

若紫にピシリと小言を言ったのは一の女房、小式部。

「なんで男の俺が源氏の妻なんだよ。小式部、おかしいだろ。」

「いいえ、おかしくはありませんわ。源氏君は継母に疎まれていた若様をここまで成長させてくださった方。その命の恩人とも言える方がそう望んで下さっているのです。これはとても喜ばしいことですわ。」

「いや、そこおかしいから。望むとか望まないとかじゃなくて、性別の問題だから。」

若紫は精一杯の突込みを入れたが、小式部の生温かな笑顔の前では何も意味はなさなかった。

「まあ、マリッジブルーかしら？」

「んな訳あるかい！」

「あらあら。」

女房達にはにんまりと笑っている。

「昨日の今日ですもの。動揺なさっていても仕方ありませんわ。」
「うふふ。今日も源氏の腕でお休みになれるのが恥ずかしいのですわ！」

「休まん！俺は断じて一緒に寝ないぞ！だれがあんな変態男の腕で寝るかい！」

周りにいる女房達に宣言するように、若紫は勢いよく立ち上がった。

「あいな！俺は男だぞ！どこの世界に男と男がめでたく結婚するのを生温かく見守る女房がいるんだよ！何で男の俺がこんな歩きにくい女の格好させられて、女みたいに髪を伸ばさされて、極め付けに男と結婚するだと！ふざけんのも大概にしろ！俺はな〜！」

肩で息をする若紫。

そんな彼の耳元に熱い息が吹きかけられる。

「大丈夫だよ。マイハニー！僕は全然かまわないから、性別とか」
「なっ！！」

驚いて後ろを振り向いた若紫。

顔を真っ赤にして耳に手を添える。

側にいたのはもちろん。

周りの女房の黄色い歓声に手を上げて答える明眸皓齒、眉目秀麗の若者。

「また、しょうこにもなく出て来やがって！こんの変態ホモ野郎！」

若紫は思いの丈を右拳に込め、自分の後ろにぴったり引っ付いている男の頬目掛けてストレートを繰り出した。

しかしその渾身の右を糸も簡単に受け流すと、男は若紫の右手を押さえてそのまま押し倒す。

「ふふつ。照れちゃって。可愛いな。僕と離れ離れで寂しかったでしょ？」

「ふざけんな！このすつとこどっこい！寝言は寝て言え！てか、離せ！！」

「ああ。この可愛い声で浴びせられる罵声が溜まんないな。思わずもつと言わせたくなくなっちゃう。」

そう言つてギヤーギヤー騒ぐ若紫の口にそつと自分の口を重ねた。
「なっ！」

「ふふつ。気持ちよかった？」

若紫は顔を真つ赤にさせる。

その若紫を意地悪な笑みで見つめる男。

「キヤー！源氏君様！エッチー！」

側にいた女房達が騒ぐ。

「おつと、この先は僕と若紫だけの秘密だよ？」

なんてほざいて、ウインクする源氏に女房達の変なボルテージがグングン上がる。

そう言つと源氏は自分の腕の中で呆けている若紫の顔を抑えとさつきより念入りに、ねつとりと口付けをする。

「んっ。うんっ。」

苦しげで、しかしどこか艶かしい若紫の吐息が漏れる。

懸命にもがくが、自分より背丈のある源氏には適わない。

情熱的で、過激な口付けに経験値のない若紫は腰砕け。

そんな若紫を簡単に抱き上げると源氏は女房達に背を向けた。

「さあ、早く二人つきりになるうね。大好きだよ。僕の紫。」

そんな甘い囁きも、真つ赤にのぼせ上がった若紫には届かなかった。

事は遡る事5年前。

病気の静養に源氏が北山に来たときのこと。

不意に覗いた屋敷にいたのが、まだ何も知らない若い若紫で、その顔があまりに自分の好きな藤壺宮にそっくりだった。

まあ、それもそのはずで、若紫は藤壺宮の甥だったのだ。

「ばあちゃん！せつかく雀を捕まえたのに、犬君が逃がしちゃったんだ。せつかくおいしく食おうと思ったのに。」

「まあ、そんなことを考えていたのですか。それはなりません。あなたはなんて幼いのでしょうか。これではおば様は心配で死ぬこともできませんよ。」

あきれて若紫を見つめる老婆と悪戯小僧の若紫。

しかし、この光景を見ていた源氏の体に電撃が走った。

――かの姫こそ僕の理想だ。

男の子ですよ？というお付の惟光の声も聞こえない。

気が付けば驚く若紫を抱きかかえて拉致していた。

「ちよつと、これは犯罪ですよ！源氏君！」

「愛とは…罪深き事なのだ。」

「いや、だから、愛とかじゃなくて、拉致監禁は犯罪です。」

「ふふつ。では僕は恋の罪人だね。裁くのは君だよ、マイハニー。」

いきなり現れた男に抱え上げられ、訳が分らず目をくりくりさせていた若紫に源氏は囁いた。

「は？何言ってるの？おっちゃん。」

「おっちゃん…。」

さすがの源氏もこめかみがピクリと動いたり。

「ふふ。坊や。おば様の望むようになりとした若者になりたくないかい。」

「なりたい！」

「なら、お兄さんに付いておいで。都一幸せにしてあげる。」

そう、そんなやり取りがあったとかなかったとか、とりあえずその日から若紫は源氏の屋敷で暮すようになったのだ。

それまではなんとも平和な日々だった。

源氏は幼い若紫に色々なことを教え、始めは警戒していた若紫も段々なつくようになっていったのだ。

そして昨日。

いつも通り、源氏の寝所で漢文を教えて貰っていた若紫に不幸が襲い掛かった。

「どれだけこの日を待ったか。」

「え？なんか言った？兄ちゃん。」

「大好きって言ったんだよ。」

「な」に、あほな事言っただよ。そんなことは好きな女に言えつての。」

笑いながら寝転ぶ若紫の上に、魅惑的な笑みを浮かべた源氏が押し掛かった。

「えっ？」

「好きな男に言っではならない理由はないよ。」

「好きな男？」

「そうだよ。愛しい人。」

訳の分からない若紫を置いて、源氏は若紫の柔肌に舌を添わせた。

「ちよ、ちよい待ち！何を。」

「野暮なこと聞くなよ。僕と君の仲じゃないか！」

にまりと源氏が笑った。

暗転。

やっと意味の分かった若紫は屋敷中に響く大声で叫んだ。

「何を言ってるんだ！このボケが！」

この後、本当に最後までいったのかは本人達のみが知るのだが、若紫は否定している。

「昨日は何もなかったんだ！なのにお前がもちとか送ってくるから！！」

「照れちゃって！可愛い。」

源氏の腕の中でもがく若紫に、源氏は嬉しそうにキスマークを付ける。

「気持ち悪い！吸うな吸うな！！」

「気持ちいい・く・せ・に」

「ふざけんなー！！」

あの日から二人はこんな調子。

源氏は仕事から帰るとすぐに若紫のところに来て、若紫を抱きしめる。

「あのな！俺は男で、お前と結婚なんて出来ないの！なんでそんなことが分らないのかな！」

「愛の前には性別なんて無きに等しいのだよ。あの日君を見てから、ずっとこうするのを夢見てきた。」

「確信犯か、この野郎！手籠めにするつもりでの拉致監禁か！」

「もちろんだよ。僕は罪を重ねることに躊躇しない。いや、むしろ罪を犯して、もっと深いところまで落ちていきたいんだ。」

「勝手に落ちやがれ。俺まで巻き込むな！」

「あんなに、おにーちゃん、おにーちゃんって懐いてたのにね。寂しいな。」

源氏はふと若紫を包んでいた手を緩めた。

そして、切なげな顔をする。

「あつ。。。」

初めてみる悲しげな源氏の顔に若紫は逃げるチャンスであるにも関わらず、じつと源氏を見つめた。

「僕は寂しくてたまらないんだ。誰も側にいてくれない。母上もおばあ様も亡くなり、父の帝は住む場所が離れ、あんなに仲の良かった藤壺宮は元服した所為であの頃のようにには会えない。美しい夕顔も急に命を落とし、正妻である葵も気持ちの通じ合う前に死に、六条御息所とも離れてしまった。」

「にいちちゃん。」だから欲しかったんだ。ずっと僕の側で笑っていてくれる人が。」

寂しげで、弱々しい笑みを浮かべる源氏。

初めてみた兄の素顔。

若紫は孤独な源氏の心に胸が締め付けられた。

「いや。誰だって言い訳じゃない。いつも温かい笑顔を浮かべて、いつも優しく僕を迎えてくれる君のような人でないと。」

源氏がそつと若紫に手を握った。

「君の素直さにどれだけ救われたか。」

その気持ちは若紫も痛いほど分かる。

だって若紫も母を幼くしてなくし、大好きな祖母も自分を置いて遠い空の向こうに行ってしまったから。

そんな自分が今笑って入れるのは…。

「僕の所為で、大好きな君が傷つくなんてね。なんて世の中は不条理なんだろう。ただ愛しい人をもっと側に置きたいだけなんだ。」

そう自嘲気味に笑う、この美しくて、飄々した青年のおかげ。

「君が好きな気持ちは本当だよ。でもその所為で君が傷つくところは見たくないんだ。」

弱々しく笑いかける源氏。

優しい若紫はつられて悲しげな顔をした。

「だから君の好きなところに行ってもいいんだよ。」

「兄ちゃん…。」

「僕のことは気にするな。君に恋をした哀れな男が一人、悲しみにくれていなくなるだけさ。でも時にはそんな男がいたことを思い出してくれよ。」

俯いた源氏の頬を一筋の涙が伝った。

―この人を一人にさせちゃダメだ。

若紫は直感でそう思った。

誰よりも美しく、誰よりも優秀で、誰よりも愛される人。
でも中身は誰よりも寂しがりなの、ただの子どもなのだ。

誰だって一人では生きていけない。

支える誰かがいるからこそ人は美しくも、優秀にもなれるのだ。

俯いたまま源氏はそつと呟いた。

「さあ、どこへでも飛んでおいき。君に籠の鳥は似合わない。自由な空ほど君に似合いの場所はないよ。」

ここで源氏の手を払うか。

それとも手籠めにされると分かって、側にいるか。

長い間、若紫はじつと源氏を見つめた。

大きいと思っていた人は、とても弱々しくて頼りない。

頭の中に色々な思い出が蘇る。

琴の練習だと言って、やたらと触ってくる源氏。

お化けが怖いだの、寒いだの、何かにつけて一緒に寝たがる源氏。

―よく考えたら、今まで手籠めにされる切欠はいくらでもあった

じゃねえか。

今更ながら驚愕の若紫。

でも…。

意を決した若紫がとつた行動は―。

未練たらしく握られている源氏の手を意に介することなく、勢いよく払った。

源氏はされるままに、振り払われた手をだらんとさせている。

あまりのショックのためか顔を上げることもなかった。

「俺は、お前の都合のいいおもちゃじゃねえんだよ！父さん母さんがいなくて寂しい？子どもか、お前は！みんな寂しいの我慢してんだよ！」

力なくうなだれる源氏を見下ろし、若紫は思いの丈をぶちまけた。

「…。」

「お望み通り出て行ってやるよ！」

そう叫んだ若紫の言葉に源氏がピクリと反応した。

しかし顔が上がることはない。

どれほど長い時間が流れただろう。

俯いた源氏が寂しげにポツリと呟いた。

「本当に、好きだったんだ。」

「―なら、もつとやり方考えろつての。」

源氏の言葉に応えように温かい体温が源氏の背にもたれかかる。

「若紫…。」

「ばーか！自由に飛び立っても、羽を休める木がなかったら死んでしまっただろうが。それとも俺に死んでほしいのか？兄ちゃん。」

「ま、まさか。」

「俺は簡単に死んだりしない。体を結ばなきゃつながれない女でもない。俺があんたの側にいる理由はただ一つ！」

訳が分からないと動揺する源氏に、若紫は初めて出し抜いたとばかりに笑った。

「頼りないあんたに背中を貸すためだよ！」

「背中だと…？」

「支えてやるってコト！世間でなんと噂されようと、結局あんたも人の子。一人じゃ生きれないんだ。」

満足げに笑う若紫は立ち上がると、源氏に手を差しのばした。

外の明るい日差しを受けて、キラキラとした屈託のない笑みを浮かべる若紫。

あの日から変わらない、眩しい笑み。

「これからもよろしくな。兄貴！」

「若紫。」

源氏は恐る恐る若紫の手を握った。

温かい手。

ぎゅっと握り返してくる手のひら。

その一つ一つを確かめているのか、源氏は俯いたまま下を見ている。

「兄ちゃん？」

「ふふっ。やっぱり手放せないな。若紫。」

顔を上げた源氏はどこまでも余裕に満ちた、魅惑の笑みを浮かべている。

ぎゅっと力を込めて、若紫の手を引き寄せると源氏は勢いよく若紫を板の間に押し倒した。

「なっ、なっ！」

「可愛い可愛い若紫。やっぱり君は僕の理想の人だよ。」

そう言つて、若紫の口に舌をねじ込む。

「もしかしてただの演技!？」

「ふふふっ。君はまだまだ青いなあ。」

嬉しそうに源氏は若紫の衣を剥いでいく。

「やめろ!この変態!」

「またまた!口ではそんなこと言つて、本当は僕が好きなくせに!」

「ふざけんな!確信犯か、この野郎!」

今日もまた、哀れな若紫の叫び声が都大路に響いたり。

源氏と最愛の君、紫の上が実はこんな関係だったなんてお釈迦様でもない。

こんな解釈も話のネタに一つということだ

ちゃんちゃんっ♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4490f/>

マイラブリーボーイ～異説源氏物語・彼女がもしも彼だったら？

2010年10月8日15時34分発行